

# 国際理解講座 Vol.3 ユニセフ講座

日時：11月27日（月）10：40～12：15  
対象：永岡小学校3・4年生29名、先生3名  
講師：岩手県ユニセフ協会  
主催：当協会

世界の子供たちの命を守り、健全な成長を願い活動を展開されている岩手県ユニセフ協会から4名のスタッフの皆さんにお越しいただき、支援活動について紹介していただきました。



まず子ども達ひとりずつに、アジア11ヶ国の挨拶の言葉が書かれた紙が配られました。「ニイハオ」「アンニョンハセヨ」「ナマステ」が使われている国はすぐ正解が出ましたが、「サバイディー」「ミンガラバー」「メルハバ」など、初めて聞く挨拶も多く、グループに分かれて一つずつ声に出して挨拶し、国によって色々な挨拶があることを体験しました。

続いて、世界では約5秒にひとりの子が5歳未満で亡くなっており、そういう子を少しでも多く救うためにユニセフで行っている支援について紹介されました。子どもの栄養状態を知るために腕に巻くメジャーでは、二の腕の太さがモップの柄ほどしかないこともあるというお話に驚きの声が上がりました。



また、水汲みのために学校に行けない子ども達を支援するために井戸を掘り、通学率を上げている活動も紹介されました。水汲みは主に10歳位の女の子の仕事で、15kg程の重さの瓶を1時間程かけて、1日に何度も運ぶのだそうです。子ども達は水の入った瓶のリレーをして水運びを体験しました。



世界で今どんなことが起きていることを知り、自分にできることは何かを考えてみて下さいとのお話に、子ども達は熱心に耳を傾けていました。



## 英語プリーズ

会員 斉藤 千廣さん

思い起こせば、真剣に英語を学びたいと思った時期があった。三十代のころだから二十年も以上前になる。それは、私がバリバリと仕事をしていた時期で、海外に行くことを打診されていたときのことである。

思い出すと、金ケ崎町の姉妹都市アマースト町から来た国際交流員で、フルネームは忘れたが、アリスン先生という女性でボストン大学の学生であったように記憶している。

彼女の講座に二年程通い、彼氏と一緒に我が家でバーベキューするくらい仲良しになった。すらすらと言えない私の片言の英語でも理解しようとしてくれ、アメリカではこういう使い方をしている。この単語を通じるよとアドバイスをくれた。



しかし、アリスンが帰国すると同時に海外に行く話も無くなったことで、英語の講座も辞めてしまった。あれから二十数年、定年になったら世界遺産を巡る旅をしたい。そういう気持ちが、また、英語を勉強しようという気にさせている。自転車やスキーのように体が覚えてしまえば忘れないというようなことは、一切ない。使わないでいると錆びてくるばかりだ。ましてや、脳の機能が低下しているので、聞き流すだけで憶えるというCDを買ったが、右から左へ素どおりしてCMのように簡単には、覚えられないようだ。それにつけても、夢はあっさり捨てきれない。一生勉強と言うけれど、決心が揺らいでいる。